

3年ぶりの北海道

「知床はいいで〜」

ふと、なにげなく辻中の口から出た言葉に私の心はすぐ反応した。

7月になったばかりの暑い日のことだった。

カヌーでは、川を始め、海も結構数をこなしてる辻中は、2年前に友達と2人で行った知床半島を思い出し、そして、又もう一度カヤックで知床に行ってみたいという思いから私に話しかけたようだった。

しかし、そんな辻中に比べ、正直なところ、私は旅する上では知床でなくても、そしてカヤックでなくてもそう大きな問題ではなかった。ただ「独りで」がこだわりだった。

今この暑い時期に快適に、そしてそれなりに充実感を味わえる旅は知床カヤック！がベストかも・・・

「条件、タイミングが合えばいつでも出かける」

そういう気構えだけはいつも持っているため、辻中の言葉を聞くや否や「知床に行こう」と、即準備にとりかかったのであった。

7月11日(月)〜12日(火)

3年程カヤックにも乗ってないのと、カヤックの経験も瀬戸内海数回、日本海2回程と初心者でもあり、とりあえず準備とシュミレーションも兼ねて、日本海(兵庫県)での一泊のツーリングをおこなった。

当日は天気も良く、夕陽を背に焚き火をして久しぶりのテントで朝を迎えた。

シュミレーションとはいえ、とてもゆつたりとした時間を過ごすことができて、正直なところ「もう知床の旅はどうでもいいかな」と思うほどの満足した2日間でもあった。

本番の「知床半島一周」の準備は、というと、これといって特別なモノはないのだが、単独での行動なので、問題なのは沈(転覆すること)にっいてだけだった。



知床の前に行った日本海、夕陽に酔いしびれた

知床半島では、岬付近の波風、そしてルシヤ、岩尾別などからの下ろし風などは荒れると小さな漁船までもその進行を妨げてしまうこともあるほどの特別な海域らしい。増して夏とはいえ、水温の低いオホーツク海。万が一沈した場合長時間も水の中にいることは不可能だろう。

そういうことも踏まえ、今回は「何がなんでも知床半島をカヤックで」ではなく、とりあえず知床に行つて海の状況を見てからカヤックに乗るかどうするか考えよう・・・
そう自分に言い聞かせて旅の準備を進めていった。

7月17日(月)

いつものことながら、思い立ったら待てない性格のためか2週間足らずで出発の日を迎える。
ロールアウトの閉店時間を早目に切り上げ、午後6時にロールアウト(明石)を出発する。
中国道吉川インターから舞鶴道を経て2時間程でフェリー乗り場の舞鶴港に着く。

こんな大きなフェリーに乗るのは初めてなので少し楽しみだ。

新日本海フェリーは午後11時に舞鶴港を出発、翌々朝4時に小樽に着くため、無駄なく事が運ぶ効率のいい時間設定である。

7月19日(水)

3時起床。フェリー船内アナウンスで朝3時に起こされる。

3等部屋であった私の部屋にはそうたくさん人はおらず、ゆっくり寝ることができた。

定刻通り、午前4時に小樽港に着く。

さすが北海道は湿気がなく気持ちが良い。と言つても、午前4時過ぎであれば明石でも同じ事か。

小樽から高速道路の終点旭川まで、そして北見、美幌峠を経て斜里に。

この辺りは97年冬にマウンテンバイクツーリングで来た事があるので懐かしい気がする。まさかこんな形(知床半島をカヤック)で再度来るとは、その時には思いもしなかった・・・



フェリーと車でウトロまで

北海道は交通の流れも良く午前11時過ぎにはウトロに着いてしまう。天気はすこぶる良く、又、海の状態も良いので、明日からだった予定を1日早めて、今日これから出発することにする。

知床半島計画は3泊4日(予備日1日)の次の通りである。

「ウトロ出港(車はウトロに置く) ↓ 知床岬 ↓ ラウス上陸(カヤック保留) ↓ 徒歩、バス等でウトロに車を取りに戻る ↓ 車でラウスにカヤックを取りに行く」

午後1時20分、いよいよウトロの港を出発。波はおだやかで風も無風に近く、海も空も青く澄んで、更に遠くに見える木々も青々と輝いている。

なんとカモメまでが近くに寄って来て私を歓迎してるかのような。

2時40分、岩尾別に着く。波風の状態も良かったためう少し距離を伸ばしたかったが、岩尾別を過ぎるとかなり先まで行かないと適正なキャンプ地がないため今日はここにテントを張ることにする。

7月20日(木)

午前5時40分起床。山登りではないが、早目早目の行動ということで7時10分には出発する。

8時30分にはカムイワツカの滝、10時10分には問題のルシヤまで来ていた。

幸い、ルシヤの下ろし風は弱く、それ程流されずに無事通過する。

ウンメーン岩を少し過ぎた海岸に上陸、あまりの暑さにビールを飲み昼寝をしてしまう。というのも、朝から5時間余りほとんど休憩なしのパドリングに少し疲れを感じてしまったようだ。

1時間程休憩した後、更に距離を伸ばし文吉湾に午後4時前上陸する。

今日は岩尾別から文吉湾まで約32kmのパドリング、こんなに漕いだのは初めてでもあり、少し横になる。

間もなくして、ここまで来る時にすれ違った漁船の方が「番屋においで」とのこと。

疲れてるせいもあり、そのお言葉に甘えて番屋におじゃまする。

番屋といっても、2階建てで何十人も宿泊可



1泊目は岩尾別で

能な大広間、そして台所、もちろんお風呂まで完備といった民宿の様な立派なものである。部屋にはテレビはもちろん電話(衛生電話)まであり、それらは番屋横にある大型発電機の世話になっている。

ここに来ている漁師さん達は6人1組でウトロから1週間、ここに寝泊りしながら漁をするという。その間の食事洗濯なども日常のこととなるようだ。

私は彼らの手慣れた手捌きによって料理された、正に獲れ立ての海の幸を遠慮なくごちそうになる。

さぞかし漁師さんは遅くまで飲むのだろうと思っていたが、午後10時になるとパツと切り上げてしまった。

それもそのはず、体力勝負の漁の仕事、そして明朝5時出発とのことなので深酒は厳禁なのだ。

知床岬

7月21日(金)

午前4時30分起床。漁師さん達は4時から朝飯の支度に取りかかっていたようだ。

海老入りの味噌汁など豪華な朝食をいただき、一晩たつぷりとお世話になった番屋漁師さんもお別れする。

文吉湾を午前6時出発、運良く今日も風も少なく波もおだやかそうだ。

「よし、きょうもがんばろう!」・・・

文吉湾から2km程で岬だ。

「あれが岬の灯台か・・・」とパドリングしているとみるみるうちに波風がひどくなってきた。そして目に入る岬の向こうの光景は今まで漕いできた波のそれとは大違いで、荒れ狂っているといってもいいほどの波風だ。

これが知床岬の荒れる海か・・・

明石を出発する時から頭にあった「明石市から来た無謀カヤッカー・・・」という仮想新聞記事が頭を過ぎる。

「というのも一月前にここ知床でひとりのカヤッカーの水死事故があったばかりだからである・・・」

初心者、そして単独、そしてこの海・・・



番屋で一晩お世話になった

正に今の私にピッタリの言葉である。

私は考える間もなく入り江に入り、風の吹き止むのを待つ。カヤックに乗ったまま入江の岸壁につかまりじっと時が過ぎるのを待つ。

そして風の状態を見計らってパドリングするも、少し沖の方へ行こうとすると強風で押し戻されそうになる。

仕方なく、岬の向こう側(ラウス側)の状態を見るべく上陸することにする。

草が覆い茂っている中、鹿の通り道らしきところをパドリングシューズのまま歩いて見通しの良い丘の上に立つ。

案の定、ラウス側の海面は波で白くなっていた。

そして、きのう漁師さんが私に教えてくれた太い黒い線が、水平線の向こうにくっきりと見えていた(遠く水平線に見える黒い線は高波、つまり沖は荒れているとのことらしい)。

カヤックをつないでいる場所に戻り、ラジオの天気予報を聞くと「午後からは更に天気が崩れる」との情報。

「これ以上待つてられない、行こう!・・・」
意を決して出発することにする。

しかし、待機場所から沖の方に数十メートル行くだけで風が行く手を拒む。

行こう・・・「ダメだ」・・・

幾度となくそんな繰り返しをしていると、どうすることもできない自分になぜか腹が立つてきた。

でも、戻る(岬を回らず出発地点のウトロ側に向かう)決心をして、何分かパドリングを続けていると少し気持ちも落ち着いてきた。

「そうだ、今回は絶対無理はしない」と決めていたではないか!

今朝出発してからもう2時間以上過ぎていた・・・

先程からの小雨は天気予報のそれを後押しする様に、大粒の雨へと変わってきた。

11時10分過ぎ、先程から目に入っていた5人組カヤッカーに追いつく。

彼らは、昨日ラウス側から来たと言う。波風の状態、天気図を見てこの旅は私とは逆コース(ラウス↓岬↓ウトロと)をたどっている。

この知床半島を十分に把握している地元カヤッカーのようだ。

昨日は相泊を出発、強い追い風で岬まで、そしてそこでキャンプしていたとのこと。

彼らに私の状況を話すと、

「この状態でラウス側に行くのは無理だったでしょう、増してひとりでは・・・」

そうこうしていると、更に雨風が強まってきた。
「やっぱり岬を回らなくて良かった！」

そして彼らは、今日はこの先の蛸(タコ)岩というところで1泊するという。
でも私は時間もまだ昼前ということもあり、もう少し距離を稼ぐべく彼らと別れ先を急ぐ。
11時50分、蛸岩を横目にパドリングしていると雨音をかき消すように背後から声が出た。
「止めた方がいいのではないだろうか」
5人組のひとり藤田さんだった。

彼は今の雨風の状況、少し疲れた私のそして不慣れなパドリングの後ろ姿に不安を感じ、わざわざ追いかけて来て声をかけてくれたのだった。

私は考える間もなくその言葉に反応、そして彼らと同じ、蛸岩に上陸して様子を見ることにした。

なぜなら今の私にその言葉を拒否する理由はどこにもなかったからだ。
いや、私には神の御告げのようにも感じ取れた言葉でもあった。

藤田さん曰く、「あのまま行ったらルシャの下ろし風でどうなっていたかわからないと思って」心配で思わず声をかけてしまったとのこと。

ある意味では、初対面の私に意見をすることに抵抗もあつたらうが、それ以上に私の後ろ姿が不安げに見えたのだろう。

今思っても、本当に「命拾いした」とつくづく感じてしまう場面である。

16時40分、ざーっとラジオを聞いているのだが、時折流れる天気予報とは全く異なりテントの外の大雨は少しも劣ることなく降り続けている。



焚火と目の前に広がる海を眺めて時間が過ぎて行く

それどころかテントをゆらすほどの風まで吹いてるほどだ。更に明日は今日同様に雨風があり、海上の高波はひどくなるとのラジオからのアナウンス。まあ日程的にはまだ余裕があるのだが、昼間からテントの中で待機というのは私でなくとも心が沈むのも仕方ないことだろう。

9月22日(土)

4時起床。昨日の雨もなんとか止み5時50分、蛸岩を出发。

波風の状態はあまり良くない。今日は昨日声をかけて下さった藤田さんのグループ(リーダーは福岡さん)5人組みと同行させてもらうことにする。

なぜなら昨日から天候の状態が悪く私ひとりでの行動にはかなり危険が伴うのではない、その旨を彼らに伝えると快く了解してくれた。

ルシヤの下ろし風

午前7時20分、問題のルシヤを通る。

来る時(ウトロ岬)はめずらしく吹き降ろす風は少なかつたためそれ程問題なく通れたのだが今日は南風も強く、噂通りの「ルシヤの下ろし風」が容赦なく吹いている。

噂では最悪の状態だと小さな漁船でも運行を妨げてしまうというものだ。

もつともカヤックは漁船と違って座礁などというトラブルはないため岸辺近くを通ることができる。岸辺近くの方が風の影響を最小限にどめられるらしい。

その通り、風はそれほどではないのだが幅にして3〜4m程、波が立ちただかりその荒波は岸辺から沖に向かって一直線に伸びている。それは穏やかな海面を龍が沖に向かって泳いでいるような光景にも似ている。

つまりその龍の背ビレが荒波の



蛸岩で1泊

それである。

私は意を決し龍に向かった。

そしてあるだけの力を振り絞り夢中でパドリングする。

背ビレに乗り上げ一瞬止まりかけたがなんとか乗り切った。

「やった〜！」思わず大声で叫ぶ。

午前8時15分、小石の多い浜(ルシャとカムイワツカの滝の間くらい)の所に上陸、休憩する。

波風も強くそして潮の流れも逆ということもあつてか私は疲れてしまい横になる。

それに比べ他の5人はそれ程ではなく腰を下ろして補給食を口にする程度だ。

あとで気がついたのだが私は沈(沈没)に備えて上半身のみドライスーツを着ていたのだがどうやらそれが体温を上げてしまい体力消耗につながっていたようだ。

この頃から更に波風がひどくなって来る。その反面太陽は激しく照りつける。

カムイワツカの滝を過ぎると更に横波がひどくなって来た。

私としてはこんな波は初めてである。

みんなが当たり前?のようにパドリングしているのでこんなものか?も思ったがオレひとりだったらこんな荒れ果てた海でパドリングはしてなかっただろう。

このころから私は5人組みに遅れ出しそして水をガブ飲みする事が多くなった。

所要所で私を待っていてくれるものの私が追いつくとすぐ出発するので私は疲れる一方である。

しかしこれくらいのことです泣き言などを言っではいられない。なぜなら私はこの5人組にお願いして一緒に行動させてもらってるのだから「疲れたからもっと休憩させてくれ!」など言えるはずがない。

増して単独でこの知床半島に来たのだから、そんな弱音は誰ひとりにだつて言える訳がない。

「弱音を吐くくらいなら、最初からこんな場所にひとりで来るな!」・・・

もうひとりの私が当たり前のように言っていた。

そして彼らだつてこの波風の強い中、昨日遭ったばかりの初心者カヤッカーの足でまといはゴメンのはずである。

五湖の断崖手前のイタシユベツ川?の岸に上陸、海はもう荒れ果てていて海岸に打ち寄せる波が大きく、先に上陸していた渡辺さんにカヤックを引き上げてもらう。

疲れも手伝ってかもう自分独りでは簡単には上陸できない程の波になっていた。

ここでは20分程休憩しただろうか。その間じつと様子を見ていたリーダーの福岡さんがつぶやく。

「これ(波風)はカヤック禁止の海上だな」・・・

そして話しは続く。

「ここから岩尾別まで約5 Kmの間、断崖絶壁が続くのでその間非難回避可能なところは3ヶ所しかありません。こんな状態なので3ヶ所全て使います加藤さんは岩尾別で上陸して下さい、ウトロまで行くのは無理でしょう。そして我々についてはウトロまで行くかどうかは岩尾別まで行ってから判断しましょう」

真剣に耳を傾ける我々のそれは少しオーバーな表現かもしれないが今からベースキャンプを出て未登峰の山頂へ向かうアタック隊員のようなそんな空気に包まれていた。

上陸の時同様、渡辺さんにカヤックを押ししてもらい海へ出る。リーダー福岡さんを先頭に菊池さん藤田さんそして私と平行して伊藤さんそして最後尾には渡辺さんが私を見守りながら列を成す。

そして「加藤さんのペースで漕いで下さい」と渡辺さん。

どうやら体力スキルに優れている渡辺さんを最後尾にするというのは福岡さんの指示の様だ。今まで皆に遅れながら必死でパドリングしていたのとは違って自分のペースでそして後から見守ってもらっていると思うと気分的にとても楽であった。

とは言え波風共に激しく私は沈むのを覚悟での必死のパドリングであった。

15分程で1ヶ所目の休憩できる入り江にたどり着く。入り江に入ると別世界に來た様に波風から開放される。

それでもパドリングなしでは同じ場所にはいられない、流されてしまう。そうしてる間にも福岡さんはひとり入り江を出て波風の状態をチェック、戻るや否やここで上陸して様子を見るとのこと。

やはり外海の荒れはひどい様だ。

上陸後、お昼も近い事もあり皆ラーメンなどで昼飯をとる。

この場所は幸いにも川が流れ出ており私は飲み水が残り少なくなっていたのでコンロで沸騰させ飲み水を作る。

というのもガンガン照り付ける太陽とドライスーツ着用のためか私は朝からかなりの水を飲んでいった。

お昼を過ぎた頃一向に収まらない風のためか「3時(午後)まで様子をみて回復しなければ



この後、前方のカヤッカーが波に隠れる程の大荒れに

今日はここに泊まる」と福岡さん。

その後も双眼鏡片手に海上を見つめていた。

午後2時過ぎ、少し風が収まった？のか「急ですが10分後に出発します」との声に皆気合が入る。

ここで足止めを食らい明日まで待つのは誰だって嫌だろう。

出発できるという喜びが皆から伺える。

危機一髪、ファイト一発

波風は相変わらず激しく、出発して間もなく大波を越えるべくカヤックのスピードが落ちると同時にちよほど養殖網の丸い浮きに接触、カヤックがそのまま止まってしまった。

カヤックの左ボディーには丸い浮きがそして右からの強い風、私はもちろんのこと私を見守ってくれていた渡辺さんと思わず息を呑んだ。

「あっ、沈する！」

大きく左に傾いた私を載せたカヤックは勘一発元に戻り、この知床で一番恐れていた「沈」を

回避することができた。私は過去にリバーツーリングなどで何度も沈の経験をしているのだがあの様な傾き状態で沈しなかったことは今だに信じがたい程の出来事だった。

2ヶ所目の回避場所には約40分まで到着、ここは完全に外海から遮断された入り江である。

しかしこの間のパドリングにより私は疲れ果ててしまった

それに比べ皆はそれ程疲れた様子はない。確かに私は皆よりはるかにパドリング等の技術は劣っている。その分余計な力、体力もいるだろうが、何と言っても私の自慢は体力である。

なのになぜ？ 上陸してすぐ水を飲み横になる。

それでも体の火照りは止まらず沈の時、体温低下防止のためにと朝から来ていたドライスーツを脱いでみる、するとどうだろう、さわやかな風が身を包み今までの疲れはどこかへと消えてしまったのだ。

「体力消耗はこのせいか！」・・・

出発の前に福岡さんの説明。

「ここから岩尾別まで30分くらいですが残り10分が岩尾別の下ろし風で一番の難所です。

この状態では岩尾別の風の状態はかなり悪いでしょう、がんばって下さい！」

私は思案した。沈の時を考えてドライスーツを着てるべきか、又は体力パワーを優先してドライスーツを脱ぐべきか・・・

「パワーがあれば沈を回避できる。パドリングも可能だろう。そしてネガティブに沈のことはばかり考えるのも良くない」

そう決めると私は迷うことなくドライスーツをハッチ(カヤックの荷室)に入れた。

「よしこれで、力いっぱいパドリングできるぞ！」

そう思うとなぜか気合が入ってきた。

入り江を出ると波風は更に強さを増していた

今までのどれより荒れている。しかし、ドライスーツを脱いでるせいだろうか喉の渇き、疲れは全く感じない。

20分ほど行った所に3ツ目と言われるの非難場所があった。

そこはちよつとした洞窟になっていて強風から守ってくれるのだが残念ながら上陸できる浜などはない。

そして問題はここから岩尾別までの下ろし風である。

この洞窟でカヤックに載ったまま5分程休憩した後最後の海に出た。

どうやら低気圧も手伝って風も強くなってるようだ。

岩尾別までまだ1kmはあるうというのにその出し風の影響が断崖の地形によってか突風の如く我々を襲う。

海水は吹き上げられしぶきとなって全身を濡らし、目もまともに開けてられないほどだ。

前に行く仲間も時折見失う程の大波うねりの中全員ひたすら岩尾別を目指す。

それはまるで戦場で銃を抱え匍匐(ほふく)前進して行く兵士のようなでもあった。

何処に地雷があるかわからないそしていつ空から攻撃されるか検討もつかない。

そんな中を我々は、ただ黙々と匍匐前進していた。

私はこの悪条件の中、渡辺さんに教えてもらったパドリングテクニクそしてドライスーツを脱いだこと(着ていると暑くて体力の消耗が著しい)で今までで最高のパドリングができた。

沈する事の心配より目の前の荒波を乗り切ることに集中できたのである



ドライスーツを脱いだら体力が戻り一番に上陸(笑)

昨日までの私だったら当然の如く「明石市から来た無謀カヤッカー・・・」の新聞記事が本物になっていたのである。

私を含め6人共無事岩尾別の砂浜に上陸、午後3時50分を少し過ぎていた。渡辺さん以外はもうこれ以上パドリングしようとする様子は見られなかった。

午後4時過ぎ、着替えをすませぎウトロに車を取りに行く。

ここからウトロまでは海上なら5K程だが陸地だと峠があるので10km程の距離になる。バスの運行はすでに終わっているので悲しいかな徒歩でウトロを目指す。

照り返しがきついウトロまでの道は知床の夏とは思えぬほど暑く小走りする足も重たかった。

1時間少してウトロの漁港近くの車にたどり着く。思わずコンビニに入りビールを飲み干す。

「うまい！」

ここに来る間途中幾度となくヒッチハイクを試みたが誰一人と車を止めてくれなかった。でもその原因が今わかった。

真っ赤に日焼けした顔にぶしようヒゲ、後頭部まで覆っている帽子はあご紐で強く結んでいる。その格好は正に戦場から抜け出してきた兵士の様だった。

コンビニのガラス越しに見たそんな自分にハッと驚いてしまったほどだ。

私だってこんな男がヒッチハイクしていたら気味が悪くて知らんぷりするだろう。

岩尾別に戻りカヤックの片付けをするともう午後7時を過ぎていた。

夕陽が沈んだオホーツクの海は闇が急速に支配し、いつもの静けさの避暑地に姿に変えていた。

それはついさっきまでオホーツクの荒波で苦戦していたことが遠い夏の日の出来事のようにさえ感じさせるものであった。

私の熱い知床の夏は無事幕を閉じた。

写真・文 k.kato

2000年 知床夏物語